九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

複文におけるindefinidoとimperfecto：過去の主動詞に従属した名詞節における実態と考察

Yamamura, Hiromi
Kyushu University

https://hdl.handle.net/2324/1932615

出版情報：イスパニカ. 38, pp.120-136, 1994-12. 日本イスパニヤ学会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

イスパニカ38（1994）

複文におけるindefinidoとimperfecto
—過去の主動詞に従属した名詞節における実態と考察*—

山村　ひろみ

1．序

スペイン語の過去の二形式、indefinido と imperfefcto の機能的差異をめぐってはこれまで様々な解釈・理論が提案されてきた。それらは大きく、アスペクト説、時間関係説、前記二説の折衷説に分けられるが、問題となる二形式の実態を網羅的に観察し、一貫性を持った方法で解説したものはいまだ現われていないと思われる。

まず、一般に広く受けられているアスペクト説は、過去の出来事・行為および状態（以後、事行と呼ぶ）の「終結性」あるいは「継続性」の表示の有無に関して indefinido と imperfecto を対立させる考え方であるが[1]、山村（1991, 1992）でも指摘されたように両形式の用例を網羅的に説明するものではない。例えば、「終結性」の有無については、いわゆる瞬間動詞にはうまく適用されるが、状態動詞に関しては「終結性」よりは「起動性」の有無の方が問題になることが多い[2]。また、動詞に何らかの補語が付加されると同一の動詞を扱っているにも拘らず「終結性」の有無の解釈が一義的には決定されなくなる[3]。さらに、談話における indefinido と imperfecto の交替を観察すると、「終結性」や「継続性」という弁別特徴に関して対立があるとは思えない例が多数見つかる[4]。このようにアスペクト説が過去の2形式の実態を十分に把握していないというのはその有効性を考える上で大きな問題である。

次に時間関係説に移ろう。これは過去の事行を把握する際の基準点が発話時点にあるか否かに基づいた説で、発話時点を基準にする indefinido は絶対時制、そうでない imperfecto は相対時制と見做されている。この説で特筆すべきは、

両形式の機能的差異が時制体系の枠組全体の中で捉えられている点である。それは、話法転換時に見られるその平行性に注目して imperfecto と現在形の間に機能の類似性を見る Lamíquiz (1982)[5]等に明らかである。後述する Rojo (1974) も時制体系全体を射程に入れながら、各時制形式を基準点の違いだけではなく、その基準点に対してどのような前後関係を持つかによって区別している。

最後に、アスペクト説と時間関係説を併用した、いわゆる折衷説に触れておく。この説の代表的なものとしては Porto Dapena (1989) を挙げることができる[6]。同書は両説の間に何の関係性も認めず、各例の説明に都合のよいほうを適宜使用しているように見える[7]。このような考察が一貫性のあるものかどうかは大いに疑問となるところだが、しかし、これは一方で indefinido と imperfecto をめぐる従来の議論には、それがアスペクト説であれ時間関係説であれ、まだ説明しきれない部分が残っていることを示すものとも考えられ、その意味においては十分示唆的なものと言えよう。

以上、indefinido と imperfecto の機能的差異に関する主たる三つの説を概略した。どれも一長一短があり完全ではないが、それ以上に問題なのは、どの説も両形式の用例を網羅的に記述した結果とは言えない点である[8]。本稿はこの記述の盲点となっている部分に焦点を当て、そこから indefinido と imperfecto の機能的差異に再検討を加えることをその目的としている。具体的には、これまでほとんど考察の対象にならなかった過去の主動詞に従属した名詞節中の両形式の機能を記述し分析していく。なお、その分析の枠組としては Rojo (1974) で提唱された temporalidad lingüística を用いる。以下、2.では、この temporalidad lingüística の紹介をし、3.では、それに基づいて実施された indefinido と imperfecto の実態調査の結果が示される。そして4.でその調査結果の総合的分析と問題点の検討を行なう。

2. Temporalidad lingüísticaについて

Rojo (1974) は indefinido と imperfecto の機能的差異に関する多くの先行研究の中でも異彩を放っている。それまで当然と見做されてきたアスペクト説を

否定し[9]、彼独自の temporalidad lingüística と言う考えに基づき分析しているからである。この temporalidad lingüística について Rojo は次のように述べている。

"Lo fundamental en el tiempo lingüístico es la orientación, el 'antes' 'al mismo tiempo' o 'después' de un acontecimiento con respecto a otro. " (Rojo 1974：73) 下線は筆者。

つまり、temporalidad lingüística とはある事行が別の事行に関して持つ、「前事性」、「同時性」、「後時性」という方向性 (orientación) ということが分かる。また、特に動詞と temporalidad lingüística との関係については次のように述べている。

"El verbo es un elemento lingüístico que posee, entre otras capacidades, la de expresar las relaciones temporales existentes entre dos o más acontecimientos y, al mismo tiempo, su orientación con respecto a un punto cero que llamaremos, (...) origen." (Ibid: 76) 下線は筆者。

動詞は二つ、あるいは、それ以上の事行間における時間関係を表わすだけではなく同時に origen と呼ばれるゼロ点に対する方向性をも示すということであるが、ここで問題になるのが origen と呼ばれるものの実体である。この origen に関しては以下のような説明がなされている。

"El origen es el centro de las relaciones temporales establecidas en el sistema verbal y si bien es cierto que en la mayoría de las ocasiones se establece en el momento en que se realiza la comunicación, la coincidencia de origen y acto de habla no es forzosa." (Ibid: 78)

上記の説明によれば、origen と呼ばれるゼロ点は、ほとんどの場合いわゆる発話時点に設定されるが、必ずしも発話時点である必要はない。Rojo は origen が発話時点以外にある例を具体的に挙げていないので実際どのような場合を想定しているのか判然としないが、彼にとってより重要なのは次の文に見られるように origen という点を設定することにより presente が他の形式と同じ扱いを受けるようになる点である[10]。

"En este sentido, (...), el "presente"indica una relación temporal del mismo tipo que cualquier otra forma del verbo. Expresa simultaneidad al origen y cuando el origen del sistema verbal se identifica con el momento en que se habla, indica, como es lógico, la simultaneidad de la acción con ese instante, pero, a través de la identificación de origen y momento del discurso." (Ibid: 78)

以上のことをまとめると、Rojo の唱える temporalidad lingüística とは事行間の時間的関係、Rojo の言う orientación を origen というゼロ点を含んだ上で表わすものと解釈できる。そして、この考えに基づきながら彼は presente, indefinido, imperfecto を次のように分析している。

presente: OoV

indefinido: O-V

imperfecto: (O-V) oV

上の記述のうち、O は origen を示し、oV は同時性を、また、-V は前時性のベクトルを示している。従って、Rojo は presente はその origen と同時的ベクトル関係（方向性）にある事行を表わし[11]、indefinido はその origen に対して前時的ベクトル関係にある事行を表わす形式と解釈していることが分かる。一方、imperfecto はこれら二形式のようにその origen と直接的な関係を持っていない。(O-V) oV の oV は (0-V) と同時的ベクトル関係にあることを示しているが、その (0-V) 自体、所与の origen に対して前時的ベクトル関係を持っているからである[12]。また本稿の対象となっている indefinido と imperfecto の分析に限って見てみると、両形式は直接的な最小対立を示すペアではなく、origen 自体との関係（直接か間接か）、およびベクトル関係（前時か同時か）の二面において対立を示すものと解釈されている。さらに、従来「現在時」に属する形式と認識されている presente と「過去時」に属する形式と認識されている imperfecto が origen に対する関係性は異なるものの、そのベクトル関係においては同じ「同時性」を示すものと解釈されている点も見逃すことができない。

本稿では、indefinido と imperfecto の機能的差異を考察するにあたり、上で示された Rojo の枠組を用いる。以下では実際のデータ調査が実施されるが、この調査結果と Rojo の分析を比較対照させることにより、彼の解釈が両形式の実態の解説に対してどこまで有効であるか、また、有効でない点があるとすればどのような修正を加えればよいのか等を検討していく。

3．過去の主動詞に従属した名詞節に出現する indefinido と imperfecto の実態

3．1．方法と結果

過去の主動詞に従属した名詞節中に出現する indefinido と imperfecto を調査するにあたり用いた方法を述べておく。

資料体は、なるべく多くのジャンルからデータを集めるという趣旨のもとに雑誌・小説・新聞とした。具体的には次のとおり：① 雑誌 Cambio16 No. 986, 988, 999～1002のインタビュー記事 ② 小説 Fernando Benzo: *La búsqueda,* Juan Luis Cebrián: *La rusa,* Javier Tomeo: *El mayordomo miope,* Gonzalo Torrente Ballester: *Crónica del rey pasmado,* Manuel Vázquez Montalbán: *Los mares del Sur* ③ 新聞 El país internacional 30/5/93

データ収集にあたっては、過去の主動詞に従属した名詞節中に出現した indefinido と imperfecto すべてが対象となるはずだが、今回の調査では過去の主動詞という部分に若干の制限を設け、indefinido あるいは imperfecto の主動詞に従属した名詞節中に出現した二形式のみを扱うことにした[13]。

以上の方法で収集したデータを主動詞と従属動詞の時制形式の組合せの種類別に整理し、さらに主動詞の意味別に並べると次のようになる。(主は主動詞、従は従属動詞の形式を示す。( ) 内の数字はデータの数。また、問題の主動詞は下線、従属動詞は斜体によって示す。)

(1) 主 indefinido/ 従 imperfecto (37)

1) Cuando el ministro de Economía y Hacienda, al finalizar el reciente

congreso socialista, se declaró perdedor, usted dijo que no lo *veía* así. (No.994 : 40)

2) (...) Una vez le preguntaron po mí y contestó que no me *conocía*. (No.990 : 116)

3) (...) Desde el primer momento entendí que *tenía* que mantener relaciones normales desde ámbitos de independencia, con las instituciones y con la iglesia. (No.995 : 41)

4) (...) Cuando se decidió convocar el Congreso, vimos que lo aconsejable *era* tener en cuenta todas las opiniones sin excepción, (...) (No.1000 : 83)

5) (...) Pero dijo que cuando se llevó a cabo él *se encontraba* realizando labores de jardinería, informa Julio M.Lázaro. (El país)

(2) 主 imperfecto/従 imperfecto (30)

6) (...) Evita me hablaba mucho conmigo y me decía siempre que no me preocupara, que allí *estaba* seguro. (No.996 : 107)

7) Con la mano en el corazón le digo que no sabía que el premio Cervantes *se daba* en esta época del año, (...) (No.992 : 130)

8) Y un comunicado de la organización enormemente confuso en el que se negaba que Yon estuviera negociando nada y se aseguraba que *se encontraba* en Bruselas de paso a otro país. (La rusa: 112)

(3) 主 indefinido/従 indefinido (16)

9) No lo sé. Contesté con la verdad. Dije que a Gustavo Cisneros lo *conocí* en la época en que era dueño de Galerías Preciados, en plan social, en cenas en casas de amigos. (No.988 : 18)

10) (...) La película mostró al público que allí *hubo* una gran tragedia y le hizo partícipe de ella. (No.991 : 134)

11) — ¿ Pudo ver cómo *fue* [el atentado]?
— No, estaba dentro del bar. (La rusa: 93)

(4) 主imperfecto/従indefinido (1)

12) El jefe de la brigada me había llevado aquella mañana, desvanecida y chorreando sangre, me contó la enfermera, (...) Entonces no me acordaba de cómo *fue* el accidente. (La rusa: 179)

3.2. まとめと考察

上記の結果を従属動詞の表わす事行が主動詞によって表わされる事行に対して持つ orientación によってまとめると次のようになる。

表—1 従属動詞の主動詞に対する orientación

	例番号	主動詞	従属動詞	主に対するベクトル関係
A	1)～4) 6), 7)	ind. imp.	imp. imp.	oV oV
B	5) 8)	ind. imp.	imp. imp.	-V -V
C	9)～11) 12)	ind. imp.	ind. ind.	-V -V

上の表は単に従属節中の indefinido と imperfecto が主動詞に対して持つ方向性を素描したものに過ぎないが、これを見ただけでも Rojo の分析とは異なる用例が存在することが分かる。

まず、A グループから見てみよう。ここには主動詞の事行と同時的関係にある imperfecto が属している。先にも述べたように Rojo は imperfectoのベクトル を oV としていたのでこの点に関しては問題がない。しかし、そのベクトル関係を成立させている準拠点[14]については問題なしとは言えない。なぜなら、Rojo は imperfecto を (O-V)oV と分析しているので、これに従えばoVの準拠点は(O-V) によって示される事行ということになるが、実際には6), 7)の例に明らかなように(O-V)以外の事行も準拠点になっているからだ。これをどう解釈するかは4.1.1.で検討する。

次にBグループだが、これは主動詞の事行に対して前時的ベクトル関係を持

つ imperfecto から成る。このグループの存在は Rojo の分析の有効性に対して異議を唱える可能性を与えるが、それについては4.1.2.で検討したい。

最後にCグループについて述べておこう。このグループに属しているのは従属節に出現した indefinido すべてである。3.1.の結果でも明らかなように、過去の主動詞に従属した名詞節の中に indefinido が出現する頻度は極めて低い。しかし、だからと言って筆者はこのグループを単なる例外として扱い考察の対象外としてよいとは考えていない。むしろ、逆に、このグループこそ indefinido の機能的特徴を考察するにあたり重要なヒントを与えてくれるものではないかと思っている。そこで、本稿ではこのCグループに属する indefinido に対して4.2.以下で特に詳細な検討を加え、これらの indefinido が決して例外的なものではないことを論証していきたい。

4. 問題点とその解釈

4.1. imperfecto について

4.1.1. 同時性の imperfecto

Rojo の分析によれば imperfecto は(O-V)oV であり、(O-V)によって示される準拠点に対して同時的関係を持つ。本稿で実施された調査においてもこの同時性は確認されたが、3.2.でも指摘したように、その準拠点に関しては問題が生じた。すなわち、主動詞が imperfecto の場合、従属節中の imperfecto は(O-V)oV ではなく、((O-V)oV) oV と分析されることになるのである。この点については Veiga (1990) も筆者と同じ指摘をしているが、その解釈については次のように述べている。

> "Es preciso, (...), distinguir la unidad funcional del sistema temporal que podemos denominar/co-pretérito/ (...), de la realización co-pretérito, prototípica de dicha unidad, pero no la única, pues hemos comprobado la existencia de otras variantes." (Veiga 1990 : 250)

つまり、Veiga は Rojo の(O-V)oV という分析は時制体系における機能単位を示すものであり、その様々な実現とは区別しなければいけないと考えている

のである。しかし、それでは(O-V)は一体何を意味するのだろう。2.で見たように、Rojo は indefinido を O-V と分析している。この indefinido の機能を示す O-V と imperfecto の様々な実現を包括的に説明する(O-V)の間にはどのような関係があるのか。この問題の解決は本稿の範囲を越えるものと思われる。従って、本稿では準拠点に対して同時的関係を持つ imperfecto の分析には(O-V)という記号は使わず、代わりに P という記号を導入することにする。この P は indefinido, imperfecto, によって表わされる過去の事行すべてを示すものである。なお、O-V は従来どおり origen に対して前時的関係にある indefinido を示すものとする。この結果、準拠点に対して同時的ベクトル関係を持つ imperfecto は新たに PoV と分析されることになる。

4.1.2. 前時性の imperfecto

3.2. でも述べたように、その準拠点に対して前時的ベクトル関係を持つ imperfecto は Rojo の分析に対して反例となるものである。(O-V)oV という分析に直接「前時性」という機能を結びつけることは不可能だからである。では、Rojo の分析は間違いとし、この「前時性」を表わす imperfecto のために新たな枠組を設定しなければならないのだろうか。筆者はそうは考えない。なぜなら、問題となる imperfecto をよく観察すれば、それが決して Rojo の分析から逸脱したものではないことが分かるからだ。

まず、前時性の imperfecto がいわゆる例外ではないことは山村(1984)で実施された調査結果によって明らかである。同論文はスペイン語における時制の一致を扱ったものであるが、以下で示されたインフォーマント調査を通して、直接話法から間接話法へ話法を転換する際、imperfecto の形式は変化しないということを確認している。

13) Georgina dijo: "Ella estaba hecha polvo, ***tenía*** 32 o 33 años."

→Georgina dijo que ella estaba hecha polvo, ***tenía*** 32 o 33 años."

*Georgina dijo que ella había estado hecha polvo, había tenido ～."

次に、問題となっている imperfecto の前時性であるが、その実例をもう一度

詳しく検討するために3.1.で扱った例を再度ここに挙げる。

5) (...) Pero dijo que cuando se llevó a cabo él *se encontraba* realizando labores de jardinería, informa Julio M. Lázaro. (El país)

8) Y un comunicado de la organización enormemente confuso en el que se negaba que Yon estuviera negociando nada y se aseguraba que *se encontraba* en Bruselas de paso a otro país. (La rusa : 112)

上の例を見ると一つ気付くことがある。それは5)のse encontrabaはdijoに対しては前時的ベクトル関係にあるが、cuando節によって表わされる事行に対しては同時的ベクトル関係にあるという点である。同様のことは8)についても言える。(ただし、この例文では同時的関係にある事行が同一文内に示されておらず文脈のかなり前に置かれている。)この時、問題となるimperfectoが主動詞以外の過去の事行に対して同時的ベクトル関係を持つというのは特に重要な点である。すなわち、これら一見Rojoの分析の反例に見える例も、「準拠点に対して同時的関係を持つ」というimperfectoの機能の要とも言える一点においてはRojoの分析の枠組から何ら逸脱していないのである。このことから筆者は前時性を示すように見えるimperfectoはRojoの分析の反例にはならず、問題はその準拠点の設定、つまり、imperfectoは必ずしも主動詞をその準拠点にしないという点にあると考える。

4.2. indefinidoについて

3.2.でも述べたように過去の主動詞に従属する名詞節にindefinidoが出現することはまれであるが、このindefinidoの解釈についてPorto Dapena (1989)は次のように述べている。(①, ②は筆者が付けた番号)

① (...) no es infrecuente que el imperfecto sea sustituible por el indefinido, como ocurre en No oí lo que decía. = No oí lo que dijo., donde se produce(...), por tanto, una neutralización. (Porto Dapena 1989 : 94)

② También el pretérito indefinido se usa a veces (...) en lugar del pluscuamperfecto (...). Esta neutralización se puede llevar a cabo, (...), tan

solo cuando el carácter antepretérito de la acción es perfectamente deducible del contexto. (Ibid: 104)

Porto Dapena は上の番号で示された二つのことを問題としている。一つは今問題となっている環境に出現する indefinido は imperfecto の代用であり、indefinido の出現は両形式間の中和作用に因るとしている点、もう一つは indefinido はその使用が文脈から推論できるときに限り pluscuamperfecto の代用として使用可能で、その時、両形式の間には中和が起こっているとする点である。以下では、この Porto Dapena の見解を叩き台としながら、本稿の調査結果および Rojo の indefinido に対する O-V という分析に検討を加えていく。

4.2.1. indefinido は imperfecto の代用か。

まず、上記①で述べられた indefinido は imperfecto の代用とする見解を検証する。これについては Porto Dapena 自身が以下のように述べていることからも分かるように、すべての場合に当てはまる網羅的現象とは言い難い。

"La oposición es, sin embargo, patente en estos otros contextos: Me enteré de que estaba en casa/Me enteré de que estuvo en casa. (el estar en casa es anterior)" (Ibid: 94)

しかし、網羅性の欠如よりも重要なことは（　）部分に示されている内容、つまり、indefinido は主動詞事行に対して前時的関係にあるという指摘である。Porto Dapena 自身この点に気付いていながら何故前述のような見解を述べるに到ったかはそれ自体問題となるので後で再度検討するが、indefinido を imperfecto の代用と見做すのは以上のことから確固たる根拠に欠けたものと判断する。

4.2.2. indefinido は pluscuamperfecto の代用か。

本稿が問題とする環境に出現する indefinido を pluscuamperfecto の代用と考える見解は従来広く支持されてきたもので、それは当該環境における indefinido の出現頻度が極端に低いという事実に基づいているようだ。確かに、この

頻度数の低さは今回の調査でも indefinido 17例に対して pluscuamperfecto 86例という数字で証明されている。しかし、ある形式の機能は単に頻度数によって判断されるのではなく、その形式が他の形式に対して持つ対立の有無という概念のもとに決定されるべきものである。筆者はこのような考えに基づき indefinido と pluscuamperfecto の実例の間に何か機能的差異がないかを検証した。その結果、以下の例で明らかなように、両形式は主動詞事行より前に生起した事行を表わすという点では確かに類似しているが、その前時的事行の捉え方においては著しい違いを見せていることが分かった。indefinido は問題となる前時的事行を主動詞事行との時間的関係に言及することなく、あたかも「(発話時点から見て) 何が起こったか」という問いに対する答えのように提示するが、他方、pluscuamperfecto は当該事行の前時性を主動詞事行との時間的関係において提示するのみならず、その前時的事行が生起した結果生じた状態をも明示することができる[15]。つまり、indefinido と pluscuamperfecto は前時性の準拠時の設定 (indefinido は発話時、pluscuamperfecto は主動詞事行時) および結果的状態の表示の有無の二点において異なっていると考えられるのである。

14) Me dijo también que, de regreso a su casa, ya no *encontró* ninguna satisfacción en las caricias de su esposa. (El mayordomo miope: 31)

15) Por el dictáfono le dijeron que la señora Stuart Pedrell *había llegado* . (Los mares del Sur: 19)

16) — ¿ Pudo ver cómo *fue* [el atentado] ?
— No, estaba dentro del bar. (La rusa: 93)

17) Carvalho encendió el fuego y al volverse vio que Yes *había dispuesto* la mesa. (Los mares del Sur: 182)

18) Recordé de pronto que Stuart me *habló* de tramitar una beca americana muy generosa (...). (Los mares del Sur: 152)

19) Me quedé callado pensando que del mismo modo que él me condenaba a estar sin gafas yo podía condenarle a estar sin fumar, pero entonces recordó de pronto dónde *había dejado* los cigarros. (El mayordomo

miope: 53)

以上の結果は一見、Rojo の indefinido に対する分析 O-V，また、pluscuamperfecto に対する分析(O-V)-V によく適合しているように見える。しかし、Rojo の分析は pluscuamperfecto が示す結果状態性を反映しておらず、また、(O-V)の部分の解釈も依然として曖昧なままにしている。彼の分析がより有効なものとなるためには、これらの問題に対して何らかの解答を提示することが不可欠だと思われる。

ところで、上で指摘した「過去に生起した事行を主動詞事行と関係づけることなく発話時点から捉える」という indefinido の機能は単にデータの意味解釈から得られた結果なのではない。それは、同じ名詞節でありながら、その主節に対する独立性において que 節を上回ると考えられる lo que 節において indefinido の出現する頻度が特に高まるという統語的事実によっても証明されたものであり、この点は特に重要と思われる。以下の例を参照されたい。

20) ¿ No vio lo que le ***hizo*** a mi hermana? (Los mares del Sur : 208) 5 例

21) Todo el mundo comprendió lo que ***había pasado.*** (El rey pasmado: 212) 6 例

以上の indefinido の機能を考慮すれば、主動詞の意味によっては、主動詞事行と indefinido によって表される事行が同時に生起した異なる二つの事行と解釈される可能性のあることが分かる。(4.2.および4.2.1.で扱った Porto Dapena の見解をもう一度思い出してもらいたい。) 次の例を見てみよう。

22) Vi que ***pasaron.*** (RAE 1973 : 519)

22)の pasaron は解釈上、主動詞事行である vi と同時的関係にあると見做されるが[16]、その意味を変更することなしに、同じく主動詞事行に対して同時的関係にあることを表わす pasaban と置き換えることはできない。pasaban が主動詞事行を準拠点とし、それと同時的ベクトル関係にある状況を述べるのに対し、pasaron は発話時点を origen としながらそれ以前に生起した事行を主動詞事行とは独立的に述べるからである。つまり22)は形式的には主文と従属文からなる複文であるが、意味的には Pasaron. Lo vi. という独立した二文のように解釈

されるのである。

以上、indefinido と pluscuamperfecto の機能を中心に述べてきたが、両形式の間には微妙ではあるが機能的差異が認められること、また、それ故、安易に indefinido を pluscuamperfecto の代用とする説には問題があることが示されたと思う。

5. 結論

過去の主動詞に従属した名詞節に出現する indefinido と imperfecto の実態をもとに両形式の機能的差異に再検討を加えた。その結果は次のようにまとめられる。

indefinido: O-V

imperfecto: PoV

この分析は、Rojo が言うように indefinido と imperfecto は唯一の弁別特徴の有無をめぐって対立しているのではなく、上記の O と P で表わされた、話者が過去の事行を捉える際の視点の違い、および、過去の事行がその視点に対して持つベクトル関係の違いの二面において対立したものであることを示すものである。

註

＊本稿は日本イスパニヤ学会第39回大会（1993年10月24日、於摂南大学）における口頭発表に加筆、修正を加えたものです。発表時、参会者から頂いた貴重なご教示、ご指摘に厚くお礼申し上げます。

1） Cfr. Alarcos (1974, 1975), Bull (1960), Harnández Alonso (1984)

2） Cfr. 山村 (1991), p 112

3） Cfr. Bolinger (1963)

4） Cfr. 山村, op. cit. p 117

5） Cfr. Lamíquiz (1982), p 26

6） 折衷説というのではないが、両形式の違いをアスペクトと時間関係の両面から扱ったものには他に Gili Gaya (1960), RAE (1973) がある。

7） Cfr. Porto Dapena (1989), p76

8） これは、例えば、アスペクト説は単文に出現する両形式しか扱わず、時間関係説

はその理論的根拠として話法転換という操作によって生じた複文に現われる両形式しか取り上げないという事実によって示される。

9) Cfr. Rojo (1974), pp. 133-143

10) Rojo は Benveniste のprésent linguistique, Bull の present point に異を唱えている。Cfr. ibid. p 78

11) ここで言う同時的ベクトル関係とは決して物理的時間関係を指しているのではなく、現在形のいわゆる presente actual, presente permanente, presente habitual の諸用法を包含したものである。

12) Rojo の用いた記号は右から左へと読まれる。

13) 他の過去の形式は法や他の時制との関係から問題が生じる可能性があるので今回は扱わない。

14) ある事行が origen 以外で直接的ベクトル関係を結ぶ点（事行）のことを取りあえず準拠点と呼ぶ。この準拠点は必ず origen を含んでおり（　）によって示される。

15) これは川上茂信氏の指摘による。

16) 「解釈上、同時的関係にある」というのは22)の主動詞が vi という知覚動詞であることに因る。

参考文献

Alarcos Llorach, E. (1975): «Otra vez sobre el sistema verbal español» *Estudios de gramática funcional del español* ,3ªed.2ªreimpresión (1984), pp.122-147, Gredos, Madrid

Bolinger, D. (1963): «Reference and inference: Inceptiveness in the Spanish preterit», *Hispania*, pp.128-135

Bull, W.E. (1960): *Time, tense and the verb. A study in theoretical linguistics with particular attention to Spanish,* University of California Press, Berkley

Gili Gaya, S. (1961): *Curso superior de sintaxis española,* 12ªed. (1979). Bibiliograf S.A. Barcelona

Hernández Alonso, C (1984): *Gramática funcional del español,* Gredos, Madrid

Porto Dapena, J.A. (1989): *Tiempos y formas no personales del verbo,* Arco/Libros S.A., Madrid

Real Academia Española (1973): *Esbozo de una nueva gramática de la lengua española,* Espasa-Calpe, Madrid.

Rojo, G. (1974): «La temporalidad verbal en español», *Verba* 1, pp.68-149 Universidade de Santiago de Compostela

Veiga, A. (1990): «Planteamientos básicos para un análisis funcional de las categorías verbales en español», *La descripición del verbo español, Verba anexo* 32, pp.237-257 Universidade de Santiago de Compostela

山村ひろみ(1984)：『現代スペイン語における時制の照応—que 節内の時制変化を中心

として—』東京外国語大学大学院修士論文
(1991)：「動詞 ser の pretérito indefinido と pretérito imperfecto —実態とその考察—」『津田スクール オヴ ビズネス紀要』 8 pp.97-122
(1992)：「状態動詞における pretérito indefinido と pretérito imperfecto—実態と考察、動詞 estar の場合」『津田スクール オヴ ビズネス紀要』 9 pp.41-58

Resumen

Un análisis del pretérito indefinido y el pretérito imperfecto en las oraciones compuestas

Hiromi YAMAMURA

Hasta hoy en día se han presentado muchos trabajos que intentan definir la diferencia funcional del pretérito indefinido y el pretérito imperfecto. Sin embargo, nos parece que todavía está lejos de nuestro alcance una teoría que pueda explicar todas las realizaciones de estas dos formas. El presente trabajo también tiene como objetivo investigar la(s) diferencia(s) funcional(es) que hay entre las dos formas en cuestión, pero lo hace desde un nuevo punto de vista, es decir, basándose en los datos concretos que se encuentran en las oraciones regidas por los verbos principales en el pasado. Para analizar los datos, se ha usado el esquema presentado por Rojo (1974), quien niega tajantemente la diferencia aspectual entre el pretérito indefinido y el pretérito imperfecto. El resultado de la investigación se resume como sigue:

① La función temporal que tiene el indefinido se describe como O-V. El signo O es el origen (el punto central) y -V significa que un evento tiene relación vectorial de anterioridad con otro evento u otro punto, así que se puede decir que el indefinido expresa un evento del pasado desde el punto de vista del origen que en la mayoría de los casos corresponde al momento de habla.

② El imperfecto se describe como PoV. El signo P es un evento del pasado y oV significa que un evento tiene relación vectorial de simultaneidad, así que se puede resumir que el imperfecto expresa un evento del pasado que tiene relación simultánea con otro evento del pasado.